

「銀」を削除する最晩年の室生犀星——自筆訂正本『抒情小曲集』から——

能地克宜

日本近代文学館所蔵の特別資料「書込本 抒情小曲集（自筆訂正本）／室生犀星」（紅野敏郎文庫、T0097354）は、室生犀星の第二詩集『抒情小曲集』新版（アルス、一九二三年七月）である。合計一〇二の詩篇のうち、訂正（改稿）が六〇篇、削除対象が九篇と、全体の七割近くに書き込みがなされている。『抒情小曲集』は一九一八年七月に感情詩社より刊行されたのをはじめとし、この新版（アルス版）以降、別版として、『抒情小曲集』（四季社、一九三四年十二月）、『叙情小曲集』（三笠書房、一九五一年一月）、『抒情小曲集・愛の詩集 現代日本名詩選』（筑摩書房、一九五三年五月）の三種が（それぞれ異装本も含めて）犀星存命中に刊行されている。これらの別版は総じて、アルス版から削除されたものや他の詩集からの再録で構成されているが、アルス版に書き込まれた大幅な訂正（改稿）は反映されていない。同様に、『室生犀星詩集』（改造文庫、一九二九年一月）、『室生犀星詩選集』（新潮文庫、一九三八年一月）、『定本室生犀星詩集』（竹村書房、昭和一九四一年二月）、『室生犀星自選詩集』（高桐書店、昭和一九四七年五月）、『室生犀星詩集』（岩波文庫、一九五五年八月）などの詩集や、『室生犀星全集 第九卷』（非凡閣、一九三六年十一月）、『室生犀星作品集 第一卷』（新潮社、一九六〇年五月）などの全集類に収

録された『抒情小曲集』にも訂正（改稿）された詩篇を見ることができない。

では、このアルス版の訂正（改稿）は、どの書物に反映されているのか。それは、犀星が亡くなる月に刊行された『室生犀星全詩集』（筑摩書房、一九六二年三月）に収録された『抒情小曲集』である。犀星は『室生犀星全詩集』の「解説」で、『抒情小曲集』について、以下のように記している。

この抒情詩は最初の「小景異情」（二十一歳頃）から「凶賊チグリス氏」に至る二十三歳まで、街を彷徨の時を隔てて制作され、折返して来る生活波濤の中にあれこれと思ひをひそめたもの、詩の優美感から放逐された荒涼の世界が漸く展望されている。全篇に亘り加筆添削の目標を以て閲読してみたが、殆んど朱を入れる余裕もない境にあるものは、勿論、そのままの集編に委せた。やはりそれらを制作した折に迫られたものは、五十年近く年月が経つてゐても、元のすがたを崩すことが出来ないものであつた。或る現実から出発した細かいものでも、その一行をも削り去ることが詩自身から拒まれるものであることを知つた。（傍線引用者、以下同じ）

アルス版『抒情小曲集』は、感情詩社版における「一部（故郷にて）」「二部（故郷にて）」「三部（東京にて）」の三部がそれぞれ「白魚（故郷にて）」「時無草（故郷にて）」「みやこにて（東京にて）」と章題が改題されたのに加え、新たに一二篇の詩を「卓上噴水」という章題のもとに収録し、四部構成となっている。このアルス版が『抒情小曲集』という詩集における最大の詩篇を収めたものであり、以後、この四部

構成の『抒情小曲集』が以後の全集類では踏襲されている。それゆえ全詩集刊行にあたり、感情詩社版ではなく、刊行から四〇年ほど経ったアルス版の『抒情小曲集』に自筆訂正を施したのだとも考えられる。

ところで、「全篇に亘り加筆添削の目標を以て閲読」し、そ七割近くの詩に訂正（改稿）がなされたが、「五十年近く年月が経つてゐても、元のすがたを崩すことが出来ないもの」の中に、犀星の詩の中で最も著名な「小景異情」は含まれていない。「その一」から「その六」までのうち、軽微なものも含めると、「その一」以外すべて訂正（改稿）されている。例えば、「その二」では「異土の乞食」から「異土の乞食」へのルビの修正、「ふるさとおもひ涙ぐむ」から「ふるさとおもひ泪ぐむ」へと漢字の訂正がなされており、また、「その五」では末尾の「すもものしたに身をよせぬ」から「すもものもとに身をよせぬ」へと「した」から「もと」への訂正が見られる。「その六」では、以下の傍線を付した末尾が削除されている。

あんずよ／花着け／地ぞ早やに輝け／あんずよ花着け／あんずよ燃えよ／ああ　あんずよ花着け

「小景異情」と言えば、詩人としての犀星の代表作であるだけでなく、「大正二年の春もおしまひのころ、私は未知の友から一通の手紙をもらつた。私が当時雑誌ザムボアに出した小景異情といふ小曲風な詩について、今の詩壇では見ることの出来ない純な真実なものである。これからも君はこの道を行かれるやうに祈ると書いてあつた。」¹というように、萩原朔太郎と犀星の交流の原点となった詩でもある。最晩年に至つて、「元のすがたを崩す」ことになる最も顕著な箇所は「その三」及び「その四」である。例えば、

その四

7

わが驛のなかに
 緑もえいせゆるなまけ郎となり
 なにごとしなければど
 懺悔の涙せきあくる
 泣める思ひるせきあくる
 へんみん

8

しづかに土を掘りいでて
 さんけの涙せきあくる

その五

日本近代文学館

【1】「小景異情 その四」（初出『朱楽』1913年5月）

「その四」には【1】のように、削除を含む大幅な改稿が窺える。

「その四」末尾の二分分の削除に顕著なように、『室生犀星全詩集』刊行時における改稿は、専ら削除を基調としている。特に、初期の詩作に窺える「或る現実から出発した細かいもの」の多くは半ば感傷的な表現であり、それらを含んだ語彙の修正や、また、「その六」のように反復表現の削除といった形で『室生犀星全詩集』掲載の『抒情小曲集』は「加筆添削」されている。

だが、次の【2】の「その三」においては、初期犀星詩に繰り返し登場する、この時期の犀星の詩を特徴づけていたモチーフが、完全に削除されていることがわかる。

その三

ありじぬ おしは
銀の時計をうしなへる

こころかなしや

ちよろちよろ川の橋の上

橋にもたれて泣いてをり

思ふを歌へる

日本近代文学館

【2】「小景異情 その三」（初出『朱楽』1913年5月）

計」へと書き換えられているのだ。かつて「銀の時計」と称していたものが、晩年に至り「ありもせぬ」、すなわち、存在しない、虚構の「時計」であつたことを明かしているということになる。言い換えれば、「銀の時計」という架空の存在を紛失するという形で、中心となる主題を空白化し、そこに新たな言葉を与えていくことから初期の詩作が始まっていたということだ。このことは、常に核となる中心を空白にしつつ自らを仮構し続けてきた犀星文学の特質²であるだけでなく、これまで書き続けてきた犀星文学の虚構性を図らずも強く意識させていくようなさまを、この改稿から読み取ることができる。よう。

つまり、冒頭の「銀の時計」が「ありもせぬ時

さらに言えば、本書における訂正（改稿）が

施された六〇篇の詩のうち、右の「小景異情　その三」を含む六篇の詩に、「銀」という文字の削除が施されている。おそよ訂正（改稿）された詩篇の一割にあたる詩において、いずれも「銀」という文字を含んだ言葉が削除されていることは偶然と言えるのだろうか。以下、「銀」が削除された詩篇を概観することで、初期の犀星詩における「銀」の意味や、それを晩年に至って削除したことの意味について考えてみたい。

自筆訂正本『抒情小曲集』において「銀」が削除された詩は左記の「小景異情　その三」の他、以下の五編になる。主に掲載順にそれぞれ確認してみたい。まずは「小曲」におけるバツタの肢である。

【改稿前】

遭へぬこのごろ／私はバツタのほねに沁みにけむ／手にとりみれば／ちからなく／

銀の片脛折らしたり

【改稿後】

遭へぬこのごろ／私はバツタのほねに沁みにけむ／手にとりみれば／

もろくも片脛折らしたり

かたすね

改稿前における、力強い跳躍を可能とするバツタの後肢の機械的な機構を「銀」で表現していたとするなら、改稿後は、生き物の繊細さを強調した表現へと変わっているとも読める。

次に、「あらし来る前」は大幅な改稿が窺える。

【改稿前】

さらさらと秋は流れゆく

草の上に 水の上に

ええてるは銀の羽虫となり

きらめきつつ

飛びかよふ

震へる木ぬれを眺むれば

あらしは今遠方において

次第に近よらむとすることし

くさむらのあたり

あらしの前のそよ風起る

空すこしく

やや動く

【改稿後】

削除

削除

削除

削除

削除

震へる木ぬれを眺むれば

あらしはいま遠方において

次しだいに近よらむとすることし

くさむらのあたり

あらしの前のそよ風起る

空すこしくうごき

草のえ水のえを渡る

「ええてる」とは、「空間を満たす媒質としてかつて仮想された物質」³である「エーテル」であるならば、「銀の羽虫」もまた仮想（虚構）の存在ということになる。この「あらし来る前」は初出題「銀時計紛失後」(『創作』一九一三年一〇月)の第一連、前掲「小曲」は同じく「銀時計紛失後」の第二連であった。そして「銀時計紛失後」の第五連には「わが失くしつる銀の時計のあるものぞ」という一節が記されている。この、「銀時計紛失後」について、九里順子は「銀時計紛失後」と同じ号に発表された萩原朔太郎の詩「秋」と比較しつつ、「銀の羽虫」「銀の片脛折らした」る「バッタ」「わが失くしつる銀時計」は、秋の顕現そのものであり、具体的な質感が感傷を深めていく⁴と指摘しているが、「具体的な質感」というよりも、むしろ生き物としての実体の伴わない、無機質で機械的な仮想の存在に「銀」という言葉が与えられているのではないだろうか。「小景異情景 その三」は初出時には「その一」として『朱鸞』(一九一三年五月)に「銀の時計をたづねゆく／銀の時計をうしなへる」と記されていたが、まさに、「銀の時計」に象徴される、実際には存在しないものを探し求めていくところから、犀星の文学が始まっているのである。

「銀」を用いた詩が続けて発表された一九一三年八月号の『スバル』に発表された「蛇」には銀色の蛇が登場する。

【改稿前】

蛇をながむるころ蛇になる／ぎんいろの鋭き蛇になる／どくだみの花あおじろく／

くされたる噴井の匂ひ蛇になる／君をおもへば君がゆび／するすると蛇になる

【改稿後】

蛇をながむるころ蛇になる／乳いと白き蛇になる／（以下改稿無しのため後略）

改稿前にあつたメタリックな質感の蛇が改稿後には無機質性が失われ柔和な生き物としての姿に変わっている。虚構的な存在から現実味が伴う存在へと書き換えられているようだ。

アルス版で新たに収録された詩、「凶賊 TIGRIS 氏」⁵は、邦題「T組」として一九一四年六月、浅草電気館で公開されたイタリア映画「Tigris」の概要を詩で表現したものである。「一俳優が三役を兼ねて各場面毎に二役以上を勤めて居る」というトリック⁶が特徴のこの映画は、昼間は「宝石商レブラン」として、夜になると怪盗「Tigris」となり盗みを働くも、最後は警察に追われて自死する。この詩で削除されているのは「金銀時計の愛」という一節である。これまで見てきた、他の詩における「銀」とは異なり、実体を伴った「銀の時計」であることは間違いない。だが、それが盗品であるという点では、詩中において、不確かなもの、定かならぬものという属性を帯びたものとして捉えることもできるだろう。

このように、改稿によつて削除された「銀」を含む言葉の多くは、不確かで虚構性の強いものであつた。そして、初期の代表作「銀製の乞食」においては、「銀製の乞食」そのものが本文から削除されている。「銀製の乞食」とは、一九一四年六月に、犀星、朔太郎、山村暮鳥によつて設立した「人魚詩社」の中では共有

銀製の乞食

坂を下りゆかむとするは銀製の乞食なり

乞食の手にいちめんに苔が生え

乞食の手にソールは躍る

129

日本近代文学館

130

乞食の眼に觸るるは林檎パイナップルの類
もしくはカステイラ・ワツプルのたぐひ

それらは總て味覺を失ひ

ワツプルのごときは實に甚だしく憔悴す

乞食は祈り

乞食は求め

遠方へ遠方へ去る

【3】「銀製の乞食」（初出『地上巡礼』1914年9月）

し得る自画像的隱喻」⁷であり、「芸術家たる詩人が身に負う受苦と栄光のメタファ―として〈乞食〉のイメージ」⁸を出現されたとされており、まぎれもなく犀星自身を指し示していた。そして、「無機質な金属と湿った植物の相容れない皮膚感覚」や「具體的な「苔」と抽象的な「ソール」が、「乞食の手に」の繰返しによって同一平面に並存し、不均衡な時空間を作ってしまう」⁹というように、交錯するはずのない異質な対象を容易に結びつけていくものが「銀製の乞食」であった。しかし、「林檎」「パイナップル」「カステイラ」「ワツプル」などの果物や菓子に「味覺」が感じられないのはなぜだろうか。「銀製の乞食」がその場を

実際に歩いていない、つまり現実世界に存在しないからではないか。

この時期犀星は、複数の著作の中で「銀製の乞食」を登場させていた。例えば、末尾に「（人魚詩社通信 其二）」と記された「懸命私録」（『詩歌』一九一四年十一月）には、「詩人の垂るものは唾といへども銀なり。／乞食のごとく貧しき詩人よ。おんみは尊厳なる銀製の乞食なり。」という一節がある。詩人が吐く唾が「銀」でできているということは、詩人が書く言葉がすべて虚構であると語っていることと同義である。

また、「私はペンを執りながら書物をしだした。あゝ其時に私は乱射せる光の中を歩いてゐる一人の乞食を思ひ至つた。何も持たず何も服かず唯求むる心気を凝らした貴重なる「銀製の乞食」を見出した。」¹⁰というように、「銀製の乞食」は自ら作り上げた自己像であるだけでなく、虚構世界という仮想空間における、いわばアバターのような存在でもあるのだ。「味覚」が感じられず、銀と苔が結びついてしまうような事態が成立するのは、仮想空間としての街を「銀製の乞食」となつて歩いていたからに他ならない。

「自らが作り上げた虚構の世界に自身を登場させ、虚構の世界に生きる自己の姿を書き続けていく」¹¹のが犀星文学の特徴であるならば、「銀製の乞食」から「一人の乞食」への改稿は、虚構世界から現実世界への帰還を意味することになる。『室生犀星全詩集』刊行にあたり訂正（改稿）された「銀」をめぐる記述はすべて、虚構性の強いものから現実性の高いものへの書き換えであった。常に虚構と向き合い続けてきた犀星が、現実を志向するような訂正（改稿）を最晩年に選択したということは、図らずも虚構世界の「衍

徨」(創作活動)の終焉を物語っていたとも考えられるのではないだろうか。

注

- 1 室生犀星「健康の都市」『詩歌』一九一七年三月)
- 2 拙著『犀星という仮構』(森話社、二〇一六年一月)
- 3 「エーテル」(『日本大百科全書(ニッポニカ)』、JapanKnowledge Lib、
<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000032705>、二〇二四年一月四日閲覧)
- 4 九里順子『抒情小曲集』論(二)——樹上の死——(『研究年報』二〇〇六年三月)
- 5 初出は『アララギ』(一九一四年一〇月)
- 6 森田生「電気館」(『キネマ・レコード』一九一四年七月)
- 7 九里順子「定型の仮構性——犀星の詩法——」(『文学』二〇〇八年七月・八月)
- 8 大橋毅彦『室生犀星への／からの地平』(若草書房、二〇〇〇年二月)
- 9 7と同じ
- 10 室生犀星「下足制」(『詩歌』一九一四年十一月)
- 11 2と同じ